

金子耕式のファミリートーク

北海道と沖縄県にて好評放送中!!

その16



■叱らない子育て

講演会のために北海道の各地を回ったときのことです。たまたま会場の近くに大きな本屋さんがあったので、入ってみました。実は、私が書いた本がちゃんと並んでいるかを確認したかったからなのですが……。

幸いなことに育児書のコーナーで、緑色の表紙の私の本が平積みになっていました。ホッと安心したところで、周りには他の本のタイトルをながめてみると、「叱らない子育て」を勧める本がたくさんあることに気が付きました。確かに、いつもお母さんがイライラしながら一日中叱りながら子どもを育てるとしたら、子どもにとってもお母さんにとっても決して良いことではないでしょう。できれば、いつも褒めたり励ましたりしてニコニコしながら育てたいものです。

でも、それではどんな時でも叱らずにすませることがベストなのでしょう。私は、そうは思いません。

子どもは大人とは違いまだ未熟で配慮が足りませんから、何度も同じようなミスを犯します。そのことは叱らないでください。何度でもやり方を教えて、できた時に褒めてあげればいいのです。それをいちいち叱ったりしたら、子どもは萎縮したり極端に反抗的になったりしてしまいます。でも、そういう問題とは違い、親が毅然とした態度を示さなければならぬ時が絶対にあるのです。

例えば、悪意をもって兄弟に意地悪なことをしたり、自分のした悪いことを嘘をついて隠そうとしたり、あるいは、わざと親の言うことに逆らおうとした時など。こう

言う時には、しっかりと「ごめんなさい」を言わせるまで毅然とした態度をとる必要があります。もちろん、なぜそんなことをしたのか、その子の気持ちや動機に耳を傾けてあげる姿勢を示すことは良いことでしょう。でも、だからと言って、してしまっただけの悪いことの責任を追及せずに、つまり叱ることなしにいつも終わってしまうなら、それは大いに問題です。

■上手な叱り方

仕事柄、書店に入るとつい育児書のコーナーで足がとまります。

子育てには流行があるようで、最近では「叱らない子育て」が主流です。その中の一冊を手にとって中身を読むうちに、著者の考え方が見えてきました。どうやら、自分が子ども時代にあまりにも厳しく叱られて育ったために、その反動として、何が何でも子どもを叱るべきでないという考えを持つに至ったようです。確かに、彼女の経験から、親たちは大いに学ぶべきところがあります。いくら子どものためを思っても、その叱り方を間違えたら、子どもは、心を深く傷つけられ、最悪の場合、自分から愛されていないと感じたりもするからです。でも、それでは仮に子どもが友だちのオモチャを横取りしても、親のお財布から勝手にお金を抜き取っても、あるいは、家の中ではサッカーボールを蹴らないと約束させておいたのに、留守中に約束を破っ

てガラスを割っても、叱ってはいけません。でしょうか。そんなことはないでしょう。

問題は叱り方だと思います。「バカだな！ 何度言ったら分かるんだ！」と言ったら、してしまったことを反省させるのではなく、その子の人格そのものを否定して、お前は駄目な子だというメッセージを送るようになります。いつもそんな叱り方をしていたら、次第に子どもは強い劣等感を持つようになり、萎縮してしまったり、逆に反抗的になったりもするでしょう。叱り方にも愛情が感じられなくてはいいけません。

こんな時は、冷静にその子の両肩に手をのせて、子どもの視線にまで姿勢を低くして、こう言えばいいのです。

「どうしてガラスが割れたのかな？そう、君が約束を破ってボールを蹴ったからだね。それじゃ、まず謝らなきゃいけないね。」
「さあ、掃除機を持っておいで。パパも手伝ってあげるから一緒にガラスを片付けよう」

新刊

「いま子育てに必要なこと」

四六判並製本
229P 中西出版
●定価 1,365 円



「家族に贈るとっておきの話」Vol.1～3



四六判変形上製本
Vol.1：151P
Vol.2：148P
Vol.3：149P
●定価(各)1,575 円

ラジオ番組「金子耕式のファミリートーク」を編集したコラム集。FFJのスタッフで元アナウンサーの金子耕氏が自らの子育て経験を交え、日本の現状とニーズに合わせたショートメッセージをお届けします。